

Main Text (The essay must be 1 page in English or Japanese)

Essay Title: 絶望からの逆転～めざせ女性研究者～

Topic Num.: 3

私は高校時代、将来の夢や目標が無かったため、勉強が手につかず毎日遊んでいた。成績も凄まじく悪く、現役で大学に入学することが出来なかった。その後、浪人して通信分野の研究をしている親(当時企業の研究所勤務で現在は大学教授)の影響で、東京工科大学コンピュータサイエンス学部に入學した。

入學したものの、1年生の時はパソコンの電源の入れ方も知らなかった私は、授業についていくのに大変苦労した。それに加え、学部の95%が男性という環境に馴染めず、学校に行くのが苦痛だった。辛い気持ちを抱えていたが、入學した以上は単位を取って卒業しなくてはならないという義務感から大学には毎日通った。授業を真剣に受けるという習慣だけはあった私は、授業を受けているうちに、ネットワークに興味を持ち始めた。勉強していくにつれ、ネットワークについて勉強や研究している人と交流を持ちたいと思い始め、1年生の3月に初めて学会の若手主体のパーティに参加した。

そこでは、男性の中に混じり、活躍している女性に研究者の方や企業の方からお話を聞くことができた。自分の成果を標準化や製品化することで、世界で活躍するために日々努力している方々と話すことで、自分も将来世界で活躍できるような研究者になりたいと思うようになった。その後、学校の授業も以前に増して真剣に受講するようになり、ネットワークの中でも特に、光アクセスネットワークとIoT(Internet of Things)に興味をもつようになった。

大学3年生になった私は成績も大幅に上がり、学部内でトップクラスになった。そのおかげで、より早くから研究するために通常より1年早く研究室に配属された。3年生の時は興味を持っていたIoTに関する文献の調査を行った。何件か調査しているうちに、IoTは豊かな社会の実現のために、その技術を使用した多くのアプリケーションがあることがわかった。特に私はコンタクト型デバイスやネットワーク歯ブラシという健康維持に役立つアプリケーションがあるということに感動した。アプリケーションの特性を調べるうちにIoTの課題の1つに通信容量や処理負荷を軽減するために、多数の微小なデータを一つのIPパケットに集約することがあると考えた。私は将来このような課題を解決し、IoTを広く普及させるための開発に携わりたいと思った。

4年生に進級し、研究が本格化した。この時、私はIoT以外で興味を持っていた光アクセスネットワークの研究を始めた。大学院ではIoTと光アクセスネットワークを融合させた研究をしたいと考えたからである。また、指導教授が光アクセスネットワークの第一人者であり、環境も整っていた。その中で私は、研究室のリーダーとして研究を推進した。同時に、他校の大学院に進学するための受験勉強も始めた。大学院入試では数学、英語に加え、面接が課せられる。この面接で今自分が行っている研究成果を活かして、IoTの課題を解決したいとアピールし、志望校全てに合格した。4年前の私からは想像も出来ない結果である。

私の今後の目標は、大学院で更に力をつけ、就職後は上記の様なネットワークの課題を解決することである。そして、私が開発した技術を発展途上国に提案し、生活に役立たせることである。その一方で、理系に進学することに対して不安を持っている女性や、理系に進学したものの、不安を感じている女性のために講演などを行い、理系女性の活性化に貢献したいと考えている。今後は、女性も研究開発や製品化に多く携わる社会になると考える。しかし、それに対しての不安や課題が少なからずあると考える。自分が範をなし、このような社会の実現の一助になりたい。